

1 次の文章を読んで、あとの問題に答えなさい。

## 文章 1

この夏、少年は、毎日のように小学校のプールに通い続けた。

小学校の児童がすべて一緒に入ったのでは、芋の子を洗うような混雑になるので、町内会ごとに区切られた子供会の班を二つのグループに分けて、午前と午後と交替でプールに入った。

朝、ラジオ体操がすんでから、朝食を急いで食べると、少年は町内会の辻まで走って向かった。上級生の当番が小学校までプールが開かれるかどうか見にいき、そこに旗を立てるのだ。

赤い旗なら、天気が悪かったり、水温が低いために中止、白い旗なら入ることができる合図だった。赤い旗のときは、少年は恨めしく空を仰いだ。

プールが始まる二十分前までに辻に集合し、六年生が先頭になって子供会ごと集団で登校した。小学校に着くと、男子と女子に分けられた教室で着替えをして、バスタオルを片手にプールに行き、入口のシャワーを浴びる。それはいつも冷たくて、「おお、寒ウー。」「キヤー。」という悲鳴がそこかしこから起こった。

(右下へ)

何とか顔を上げたまま、平泳ぎで十メートルほど、プールの横に横断できるようになった頃、少年は丹治君から、「足の蹴り方があおり足になってつお。」と注意を受けた。それで、はじめて言葉を交わした。丹治君とはクラスが違うが、子供会のグループが一緒だった。

それまで少年は、足首を伸ばしたまま足の甲で水を蹴っていた。それを足首を反らすように曲げて、足の裏で水を蹴るようにしてごらん、とプールの端につかまって丹治君は何度も実際にやってみせながら教えてくれた。

その言葉にしたがって練習すると、なかなか前に進まなかったのが、嘘のように、一と蹴りでグイーツと向こう岸が近くなった。少年は、まるであめんぼうになった気分がした。

手の掻き方も、回すんじゃなくて、伸ばした手のひらで水をキヤツチしたらそのまま脇を締めるようにして、一直線に一気に手前まで掻くようにするといい、とも丹治君はいった。

平泳ぎが、二十五メートル泳げるようになると、次に少年はクロールの練習を始めた。早く泳ぐにはクロールが適しているが、肝腎の息継ぎがなかなかうまくいかない。それでも、息を止めたまま泳ぐ「面かぶり」ではプールの縦を半分ぐらいいは進むことができた。

## 文章 2

目標の二十五メートル泳ぎ切るためには、どうしても息継ぎを覚えなければならぬ。少年は家で洗面器に水を張ったり、お風呂でも練習をした。だが、実際のプールでは、どうしても水を飲んでしまった。

プールに飛び込んだ少年は、懸命に手足をバタバタさせてうごかす。

とにかく息が続く限り、一メートルでも遠くまで泳ぐんだ、と思いながら。

そのうちに、耳に切れ切れに、歓声が聞こえてきはじめる。自分があがっている水しぶきがきらめく。

いつまでたっても息苦しさは襲ってこない。身体が軽くなる。水底の白いコースラインを一心に見つめながら、少年は泳ぐ、泳ぐ――。

ふいに少年は、必死になって掻いていた手が、何かにぶつかるのを感じる。いつのまにか、ゴールのざらざらした壁の淵に少年は立っている。

(佐伯一麦「少年詩編」による)

### ○ことばの説明

① 芋の子を洗うような――せまい所に人がたくさんいるようすのたとえ。

② 町内会の辻――町内にある交差点。

③ 「足の蹴り方があおり足になってつお。」

――「足の蹴り方があおり足になっているよ。」  
という意味の方言。

あるとき、新聞に梅の花についての記事が載りました。梅の花は他の木から花粉をもらわないと、花は咲いても実を結ばないと書いてありました。

やがて梅の季節になりました。私の住んでいたところの門の左右に白梅と紅梅の木があつたのですが、ひよつと見ましたら、白い梅がたつた一輪、咲いていました。何とも言えない、いい香りで、私は「たつた一輪、友達もないのに咲いているんだな。」と思いました。この花は、他から花粉をもらえなくて実を結ばないのだろうな、でも、早春のすがすがしい朝の喜びと、すばらしい香りを私に与えてくれたのだから、この美しさは変わらないのだなと思いました。

人の仕事もそういうことがあるのかもしれませんが。一生懸命やった仕事がたとえ実を結ばなくとも、咲く美しさだけ、仕事をしたことが値打ち、というものもあると言えるのではないでしょうか。

(大村はま「灯し続けることば」による)

〔問題1〕

文章1と文章2に共通していることはどんなことですか。それを文章にまとめて、二十字以上、三十字以内で書きなさい。

〔問題2〕

〔問題1〕でまとめたことについて、見聞きしたことや体験したこと、の例をあげ、あなたの考えを五百字程度で書きなさい。なお、段落をかえた時の残りのます目は字数として数えます。